



古
那
三
卷





〇余々々少々の花をとりてみればくも
 根を折れ酒折れ此の流るりと関し
 己様時限一里半の伯を此流
 らりやと懐なるとも紙とくはさ
 具えし時々の字をみればやとく
 見兼ねる亡師の本法師此の面り
 あたれは此の果てに物をたたく
 批とりて書きたる字を久しきたて
 なるより一と撰名は遠くむみ

乾坤れおの遊戯も家も英れも道
師のたももの命あもまやと終は
此とわまを途く肺行くと語る言
日く新——き城探わい状
古人のあやま常——るさう煙籠の同小
ならも久刻——あやくの人——子導す
倦本——ありとまおれさう——もくま
一味のめ境今道遠——もくすく肺里
又さりて父母れ思因とら母城むくゆ

本——おのつら此中——命魂れま
邊——なま——いひは——道前——子
物——むれと科湯早久も解とのも
苦——都おぬ石野れ境の各都命も
果——ひえの物采さう——之後も
撰者れ心まらひく——韻をく調ひ
たれば先ら列されたる——皆れ
秘——義成かすたにおよる例——乃
口法——子林——守り——子奉——系——心

— 世に女をよむに借るは
の讚よむに— かなたや

と浮甲辰仲秋可中口

母漏子一具

在書

東山丸



菅道善

脇起俣語之連歌

木本居士

佐けを築候い少くも秋の月

門を沙茅よ置このちる露 五株

綿の虫舞和曳早うおとのまを 伯遠

まを煮るそかりを誰も答ける 文昇

氷る秋と思ひあつる— 糸の味 荷少

那もかき寄るま西のねねつめ 素伯

手向の繪名詞書より

新しきより	山外
深川の穂菅を	宗普
手おきく	百丈
行なわ	可承
日たし	素伯
すけ新也	彦生
掃除し	方竹

おもひけ	秀翁
さるや	荷少
まら秋も	古春
曾より	文昇

墓前

本屏に	得基
-----	----

身治れども打解や
師の三回三言せり

侍らぶ勤り居りてあぐりのほら
五株

おまは清きまの浦の月の明るあふさるを
清ぼしむの海にうらやまあをさう旦野
の風光を一壺とすけは中へ海ををぬとむ
是とて海の位よりあくと赤は秋末本園の
大祥忌のあがりぬきて所ある華とま
てその恩を報い侍れ

ねまかしく梅のおまのいと下
伯遠

あまのあまのたふさる居まきまりし
時親かりしを居まらば後年もあま
お形あまのつれは因にまき向とて
そのまきまをばさる

やむ時も又あつしのおちのうら
沙鷗

うらまきまの梅屋に居まきまき
一番

あまのまの枝まきまの佛もまぬや
曾夢

あまのまのまきまの鳴性
小菘

あまのまのまきまの冬あま
後物

屋根まのりのまの町や秋の風
梅價

連翹やまのまのまぬまの色
若非

まのまのまのまの初あらし
平山

折らうのくかきうつるるるるるるる
 一編とくろれ生うあうるるるるるる
 口ら入きく鳥とけうるるるるるる
 おさめりよほひ者うぬ砂もまじ
 耳をうく聞えうう結し解の音
 和ふふの蘇よりけきききききき
 月れりるるるのちきききききき
 鉛の濁さゆんうちあうるるるる

叢
 農
 南
 桑
 雉
 櫛
 粗
 護
 文
 物

拾香

うちむのうさわ月うううううう
 草もあむらふ吹あひく月
 酒さる家うら秋の色もさし
 笛けうくろをうしあひもさり
 歩けうあま心乃すまぬ衣う
 うむあのみうう掃除きる池

杜
 有
 山
 外
 五
 株
 有
 外
 株

手古う飯屋の宮を祭らう
 於葉つむは訓もぬ新巻
 通心路は椽を傳へハ隣
 喉着いやしき葱は福耳香
 露花入るもあく星は雪も形
 いこの尺ゆふ糸をさうらこ
 翁より洗米をうり入立まこり
 去るのをとり賣れこも櫃

有 外 株 有 外 株 有 外 株

樽をいり下地を戻けとあはれを
 都々流きも里の一佳
 月と花と花本も思ふ影をい
 練子手成おと温盤半日
 若^名まよふやうれ若く春の椽
 人り用むもちり人茶の湯若
 凡早や一古まはあさうり住せ
 ゆ久もあはれきハ家の浪音

株 有 外 株 有 外 株 有 外 株

外 市をわきわきと照らすあり
 外 遠 眠るは清くと孫よいよや
 外 株 歌りた肩衣つけり別とまや
 外 遠 けりたの世おくあら打の存
 外 株 中は産芽の芽あまぬのりあち
 外 株 産芽産尾よあいのる 阿き福
 外 株 外 遠 株 外 遠 株 外 遠 株 外
 外 遠 株 外 遠 株 外 遠 株 外 遠 株 外

外 市をわきわきと照らすあり
 外 遠 眠るは清くと孫よいよや
 外 株 歌りた肩衣つけり別とまや
 外 遠 けりたの世おくあら打の存
 外 株 中は産芽の芽あまぬのりあち
 外 株 産芽産尾よあいのる 阿き福
 外 株 外 遠 株 外 遠 株 外 遠 株 外

法遠

助宣

見る月を夜をく夢けと世茶
 身より玉風の月そ夢川流
 夜より角力ふれを悔むらん
 かなきうぬりも門布めく
 物寄れよとく多き世に
 ともや雪雀のいそかき虫

伯遠
 山外
 五株
 遠
 宣

田^り流き工夫流るる雪羽水
 み契と起女山よりけし行を
 別巻路を海をくしし 暮衣
 燈の影うと起竹う志乃宵
 新立を好むは僕よ世あかし
 大坂中傳るは是ぬ 便 船
 かり屋々神興梁出を統する
 鹿る暮さを笠うりしあき

株外
 外遠
 宣

中宮の清くも若くは月影の形
うつらねたるはとる高嶺
おきくの心もよ縁なき
茶はは風もお地の人柄
血辨名を洗ふ汀のぬるも
俗より修りきみもつる寺
緒うたはるつるの若き
又修子よともは証の禮状

撰 外 遠 宣 撰 遠 宣

高きより名の立甲道より
顔合きくも志くぬるはる
二三折思へ向く家も冬の日
ましく日散るははおれは茶を
暮心のこはるる生飯もあま
灘乃うしおきりるかこ袖
石盤と吹草仕のけるはの
檜皮は臭り明はるる月

撰 外 遠 宣 撰 遠 宣

人

けつろりと雉の尾を曳く日御子
 法も雪の又も新瀬の出先この船
 今も不ふじうり、暮や水は清
 夕かけの葉こしと映る清もさ
 あさきやも多葉火のうり竹柱
 春風やをめぐりたり吹りし
 うららかに小鳥の飛や空はく
 山を松よりけき急ぎし暮らる
 泉
 仙歩
 朗風
 十代丸
 茶魚
 黙池
 萬明
 泉丈

卯の花や虫を焚く程の冷は清
 とおふせし梅をまよはせは
 ちかぢちかぢを見つるさきさき
 稲妻のまひうす影や門や
 席は杖をさすも尺さしを
 ちかぢの月より清く佛光
 河内
 舟は燈る月をわきまへすみ
 古鏡

しき跡の松の葉もる野山より 不二門

拾津

多敷五郎 寔に松の葉もる野山より 鼎左

松の葉もる野山より 其山

松の葉もる野山より 素屋

松の葉もる野山より 林曹

松の葉もる野山より 杜吟

松の葉もる野山より 其職

松の葉もる野山より 其身

松の葉もる野山より 白鷗

松の葉もる野山より 祇白

松の葉もる野山より 彦岐

松の葉もる野山より 蟻兄

松の葉もる野山より 崇金

松の葉もる野山より 素曰

松の葉もる野山より 班水

七もくとも月すまらばう程柳 五 襟
殊縁さやふ髪明きく小松皮 淡 皮

伊勢

鳥さう能滑中の上や唇の鐘 碧 秋

伊勢

物さけを愛ちぬ言知あり雪はま 荏 皮

白き〜〜程は龍さ川 葦さう水 一 函

ゆさうさう雪さ屋さ雪の舟 方 汀

明あさ秋やもさ秋の日枝鹿 流 芳

ひささかりさむさ又さ〜〜はさささ 荏 皮

降さう〜〜雪さ〜〜の涼雪さ 洒 亮

雲さ〜〜川の下は〜〜人さ 東 宇

やま〜〜秋さ〜〜屋の〜〜さ 省 吾

物さ〜〜り おさ〜〜さささ〜〜さ 梅 塚

川法さ〜〜さ風や〜〜のみね 石 薪

いさ〜〜物さ〜〜雪さ〜〜温盤のり 夜 白

雲霞をくく下りてけしき漸き

桐一

尾張

波生華をいしすらわの雪解け

疎雨

通河舟一日をちて古岸にむ

鰯居

まつ忠也海へをちて秋の暮

黄山

一多んは晴る月秋を冬来立

一清

雲を氷う道り 螢うれ

而后

たあくとくし小用多き小暮森

桃色

新水新むと泡をくく二月にれ

杜佳

古急ちあきと浮葉八ん山の地

鴻水

暮きりや新を冬ある砂川原

月底

暮う様のは月もんを露の臺

梅裡

雨しき綿の上をや麦の粒

金樵

浪おとる忠くあきや雪の粒

應知

した蒨や何あうる落々かき拍

芝石

りたあきくいら小岸をき浪り

鳥津

垣はく出の處より小松曳 蓮陽
 叶をみちまらうなる水は日蓮の行 我竟
 かの日蓮もむさしを撰むんは 露井
 ものいふる人よ水明の字の露 李暎
 きしゆや草山ふきぬはそら 惠文

冬河

さひしきふあけつんさきぬは 牟地
 名もや東の国くはみちのむ 石采

きやまの志しきりぬ坂の雪 三岳
 荒川に舟りやまらも梅はむ 桐古
 人きよかくも信やうはつもこ 完悟

年月立書

皆桑葉竹まみ合へ市々露あり 塞馬
 おより出やしる影多き人面り 蓮宇

辛味

空守影をばまらぬ月取うき 水竹

遠江

先多形む六日の空をなす川 青菱

吹そむる能くつてあけりあり 清魚

阿きる物の濡羽うけや青嵐 杜水

あぬるむ回の續きあり草花色 且松

駿河

あけやめさ飛鳥はくくはくく 見跡

あまきささるるるるるるるるるる 漣山

あきかひりくくあきかひりくく 成充

あはしくやと森と移る空のり 碧山

甲斐

あきかひりくくあきかひりくく 通志

あきかひりくくあきかひりくく 可轉

あきかひりくくあきかひりくく 道示

あきかひりくくあきかひりくく 草也

あきかひりくくあきかひりくく 雪里

名月や竹を火に焚く竹のおと 嵐外
近頃の家の柴火は火のゆるみ 枯翁
障子から透ける燈火を花の白 秋哉

相模

表の屋をむく曇りや 籠草よ 立宇
葉のありてよ 秋 萩より 福壽州 宣頂
枝打と 柳 葉よ やまの 花月 簾水
何よりと あられを 吹なり 蜂の風 如く

武蔵

月三夜を 加ふる 野山の 光の 太良差
りたの 庭に 居る 身は 遠く 雲を 正价
先を 走る 赤い 牡丹の 五渡
七夕や 雨の 影を しの 両青
一回 一枚 花の 出る 花の 三葉

安房

第一目 けし 花の 消る 梅の 香 鳥周

上総

今宵を眼をぬ秋を桐一葉 霞雪
むらさや入る事ぬ尾の家 永保
川合ふ細き出雲をさすの志 味牛
秋意をさくさくしと海を望 音人

下総

さつみやり影ふとも鳴ぬ虫 勾芫
露らるや秋屋か人の暮ぬよし 江月

流き来る芥さくさくや鳴くものさつ 楚南
いづれやそ終るゝ桐の葉もさき 嵐鐘
二度さくさくはけき直き志の書は 之桂
とけりよりけりさくさくけり 志木

常陸

后は月さむや屋上のむとありし 野原
あけみやはと燈さくさくさく 一兆

近江

月も思ふにせぬと月乃日 楓下
 家出ぬと結句折る雪梅の丸 碓山
 永き日の油灯の書を惜しげに 九高
 字をむき物結し物書をおろかり 玉脂

略三澤の西よりの
 ちのりさ思ふ

雨影とわらう雪旅の枯花音 虚白

信濃

風と花をうき抱身と松のうち 若人

山花蕙々入るも晴る真の空 曇芳

上野

昼修を修めしむもねるは時音 西馬
 小空かゝ出るとは道小秋のふき 竹烟
 蚊帳をよみし修古の吟を 雪居
 暮るる月色うらりぬるるまは 臥雲

下野

木かゝるの木とてききし梅の花 人

河津川舟をる 秋明の風 其僂
 暮叶の多し 暮叶のち 暮一葉 二葉
 仰向と暮る 舟をる 舟をる 完車
 肩は子よん 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 夕ある 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る

暮る 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る

越後

舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る
 舟をる 暮る 暮る 暮る 暮る

暮るかゝるん—山陰や蝶の春 大恒
醒き急振の風やちよ木に葉 西畴
やまゝの影の—流き雪の氷 宇弘
風是る流より—人の名葉の 茶山

加賀

もたぬ露多しや清き花あり 悠平
秋操や木深きかゝる人の春 年風
冬ちのき田ふ多し—人の名葉 北山

夕陽や空をむす庭に梅の枝子 柳菴

能登

ゆきをふりてさるるむす人の春 呂鳳

丹波

ほろきぬ露を枯れ花の春と 九華

播磨

出るをふりて山をさるるりふぬ 可大

美作

朝の光はさうく白く朝の空 耕 雨

備前

ささこおたけしきのあゝね田植の 布 國

志々原のこゝれ多持てきくきなり 孤 山

備中

浪の色林をささや 沖の風 淡 亭

安藝

人まぢくおとあつる 渡し水 雪 頂

紀伊

さかむときこゝろおと初日の 閑 那

いさつまはあもやろくきく山 茶 畑

空里いさつらぬ色や落し 新 峰

淡路

山路赤く川きき見ゆ 蒼く丸 守 石

かり松のなつりや中やうれ尾を 田 風

木花を急ぐさうり 依りまうし 希 原

水に信あくる哉くやかきつても

梅廬

阿波

ふあひの鐘よりうきき花らん水

露泉

湖のあはれかけりや苞う梅

愛像

まやうあそび風よりまじり色けり

萬像

讃岐

あそびまや水も舎るや夏は月

今是

青柳のまきも心星やいつは

鳥石

あつらふ持寄つる水見草

茂推

伊豫

石をたき染垣も物くや蓮花

映門

まひりくわ其土垣あり深古鳥

紫人

かゝれ果を抱ゆるさくつる花水

雲推

老めらや懐くさくたる温園扇

鸞居

筑前

身清めりたる其白也如あり

兩堂

居あつてはまの里まのや松林 宇途

肥前

極東屋を出て暮の付やまの月 岱雲

浪きまの鳴の古家やあふやま 南彦

暮れくはくぬるむ野あふの 龍彦

名月とかさるや山りかるるを 眉山

さうあつと増屋物せり初めの秋 路芥

あだまを妹や川十日二十日丸 悠々

日向

燈籠つ了繩の少き漁場を 駝岳

涼しや舟とらふねの小あきまひ 双鳥

江戸

紅梅を咲かす女を又くは
 日よりの竹居る鳴き通るけり
 山あり澄むを古もやまはな
 湖風より来る葉もあるも
 葎ともやういひ行く女唯の鼻
 中へ草や只秋も来る池と丘
 碓の多し来るや雪の白くは
 茶静

十五

原中やほたるもあまの秋の蝶
 飯粒うせぬ秋の赤龍も木は
 丁知 鳳朗

羅漢寺

桑は穂の眼を通るもや佛色
 ともく都をりしう晴る秋の月
 二度啼くははる色もくも
 雲を眼よりみし仕舞へ梅白し
 和心と木は竹解くも志も
 一具 由捨 碓炭 色洞 叩月

十六

西のついでと暮つて動くや多楓
 言山
 橋ふねや多箱もきくぬ椽きい
 麻交
 野のあつた尾をさかりや十二歌
 茶次
 冬は山おはせきこひもんられと
 味舎
 うきくと暮つてさうや箱の月
 南枝
 字急ぐの休よかゝる布 埃
 菅葱
 おの白は踏しや山まぬ蝶の風
 虫囀
 お仙たきかりと花のしうあり
 浄友

秋風の人よと暮りてきり
 菊古
 何なくふるゆふを雪を沖の空
 由之
 橋あはせと焚のさゆ木を急ぐ
 金合
 山よりお田を橋へ入る初志くき
 氷壺
 晴き朝をさやうふ鳴や布と紙を
 湖山
 今星は別く陰のふとあり
 呂史
 けき秋のまら風見たる花壇に
 見外
 年明く暮る船のほく柳に
 溪高

あしとねや川さる来し世も春	流芝
まらねをわかぬ色さぬ法や若ね葉	惟草
をしらふもくく一日夜書うれ	秋香
白と紅まねあふたりのまも重か	梅笠
むと春の結まぬまや雪の雉	祖郷
墓の終乃まやまゝくや水の春	夷則
三日月や休くを警のかるる輝	魯心
ねむとねむ思ひ餘るる秋の月	雪箱

名月と見えくまの藤は春	氷谷
まらねくく町の名をく新春	呉城
あし礪の波さみまら月見小	泉郎
しら春はくくくあはれ	遅流
あましくと月さるね帰る玉	永之
あましくと何まら山乃月	大鵬
白と結くまの河原のまみ小	為山
陣中く雪の春のくまら小	春吟

一ツ糸小巻はる——天は川 直業
 うら枯やすらむあつる池の産 如叶
 野のま——やまよまあまの今 小物
 あくんえくかきく行く法あり 於産
 いちちやあ居さうまくまの秋 由
 けのめきやおのきと折る炭の音 梅外
 遠くか——あかかんゆるやまきぶ 仁実
 榮の——お奥やまのせま尾の松 杉居

春退く見えはあ古風や松の雛 壺天
 おぼきりを抱えさるるお山は 風外
 春山も空もむらつや懐く雪 折桂
 まつ風を急くいなるも春の海 緑女

遊歴

あら海より燈舟に跡暮るん 玄子
 ねむいあ——いんまし初時音 荷了

常盤木の時より里々の名葉下
 波同
 多む人の心屋を現く少暮るん
 石外
 名月や歩けりを傳かざる山の影
 呂川
 杜の燈乃其まゝ照りけり
 縁飾
 麦は穂を風をち見ゆる生つ穂
 素和
 橋の影あり湖を志す
 素行
 灯とせ傳垣のあちり
 天趣

澄しや昔は古葉のひと
 伯遠

竹筍と潮乃よむむ江の口
 五株
 白濁は新持出を産養
 遠
 宿る秋まゝ多江月乃
 八月
 春あきもまゝのうらむ
 遠
 密柑荷伝る國乃物
 株

宮奴の何ゆきと嬉しかり
 恋せぬ未世傳人信うぬ畏
 蓬生の難ぬを結ぶは細り
 夕ふら雪は日暮ふと居る
 清くくと結を隣ゆ茅 吟
 僧都を汚き思の小使
 月空く明結ぬ実と葉とわす
 さらうと生くわるとつ雪の上
 株 遠 株 遠 株 遠 株 遠

病ぬく純とたまれと葉のあく
 温泉とくわぬ心叶ふいと古
 筆と肩とたむのさかかあし
 了入新うとくりもあつるあり
 利名葉也ーとまよ上戸は海ーの空
 梅実くま役とすこらぬ
 遠いよあつ信貴の骨も遠及か
 ちやうとをさうとて芥焼せら
 株 遠 株 遠 株 遠 株 遠

升つ来りて地底加ふるをみ物し
鉄製器ふ遊女ひたり起たり
象位を唯う文婦の竹格子
清うひの若く鞆もまゑきき
梳り次く樹を酒の流るる
三日をともふ古りある 亭
月守き門の多き権宗し
陽年鑑より新居の晴やう

遠 株 遠 株 遠 株 遠 株

夜紅^う葉四十粒老もくうり坂
あま^り—— 持し供物並食ふ
昇地地の今古語之境やうを
ふ用を強し研く時のある
朝夕も華をまねき—— 松乃内
柳花芽也—— 流きこま

遠 株 遠 株 遠 株

書
英
末
雄

雄
末
英
書

